



巻 頭 言

学会の創立にあたって

上 田 隆 三

柿わか葉のすがすがしい季節になった。花々も咲いて散り、大地にも草が燃え立つようになってきた。人工衛星から観測される日本列島の上空の雲のたたずまいにも、春から夏への気象の移り変りが感じられる。

想えば今年の今頃、仲間うちで表面科学に関する集まりをつくろうという話が進み、わが国のこの方面の指導的な立場の先生方にもご相談申上げたところ、ご賛同が得られたので、それではやってみようかということになり、この学会は発足した。設立総会が行われたのは、昨年(昭和50年)の9月13日であった。

始めは小集団の同好会的なもので、どの程度のメンバーが集まるのか見当もつかなかった。3～4カ月で1,000名を越す会員数になり、現在でもまだ増加しつつある。それぞれの研究分野のかなりの人々が表面科学の最近の進歩に関心を持たれ、相互啓発や情報交換に興味をもたれてきた結果ではなからうかと思われる。

ひと口に表面科学といっても、それぞれの分野の研究者の画くイメージはさまざまであろう。それは国によっても、基礎科学や工業の現状やその歴史的ありようにも関係している。しかし、表面や界面の科学が今日ほど多くの研究者の関心を集めた時代はなかったように思える。それには多くの要因が考えられるが、そのきっかけをつくったのは、電子分光法を主体とする表面分析手段の発展であろう。清浄表面という概念が生まれ、従って表面の構造、組成、原子的および電子的物性の知識が飛躍的に増加した。最近10年間における表面科学関係の発表論文数は2倍以上に増加したと言われ、その進歩発展は科学の歴史においても特筆されるべきものであろう。

表面および界面に関する研究は、基礎的な研究分野ばかりではなく、物理、化学、電気、電子、機械、潤滑、原子力、金属、写真、生物等の広範な工業の分野に広がっている。さまざまな分野の多くの方々の協力が極めて大切である。

この「表面科学会」は、設立されてまだ日も浅いが、この方面に関心をもたれる多くの方々のご協力によって今後更に発展することを祈っている。現状に密着しているだけでなく、先見性のある研究の協力と展開を期待したい。この学会がそのための一助になることを願っている。